

一下掛りは「一所不住の僧」とする。

二「南都」は奈良。「南都七堂」は、東大寺・元興寺・西大寺・薬師寺・大安寺・興福寺・法隆寺の七堂寺（『拾芥抄』下）をさす。なお下掛りは「南都に候ひて 靈仏靈社拝みめぐりて候」、観世流古写本は「南都に参りて候」、金春流古写本は「南都に参り名所旧跡残りなく拝みめぐりて候」など、異同が多い。

三 大和（奈良県）の長谷寺。初瀬観音の靈場。

1

四 天理市石上の在原山本光明寺、同布留の良峰山石上寺、同樺本の在原神社などをその旧跡とするが未詳。「初瀬へ詣でけるついでに在原寺を見て詠み侍りける かたばかりその名残りとして在原の昔の跡を見るもなつかし」（『玉葉集』雜五、為子）と見え、中世には荒廃していた。

五 在原業平。一〇八頁注一参照。

六 紀有常の娘。有常は一〇八頁注四参照。

七 現在天理市の地名。在原寺の所在地。

八『伊勢物語』二三段に見える歌。一〇九頁注一二参照。その物語を、業平と有常の娘のこととするのが中世の理解。

九『伊勢物語』（二三段）を言う。

一〇〈紀有常の名とは反対の、はかない無常のこの世〉。「有常の」が「常なき」（無常）の序。

二「妹背をかけて」は夫婦の約束をすること。無常のこの世で約束を交わした夫婦と一緒に弔おう、の意。

2

後見が薄をつけた井筒の作り物を舞台正面先に据える
【名ノリ笛】でワキが登場 常座に立つ

「名ノリ」^{正面へ向き}ワキ「これは諸国一見の僧にて候 われこのほどは南都七

堂に参りて候 またこれより初瀬に参らばやと思ひ候^{井筒の前に立ち}これなる

寺を人に尋ねて候へば 在原寺とかや申し候ふほどに 立ち寄り一

見せばやと思ひ候

「サシ」^{正面を向き}ワキへさてはこの在原寺は いにしへ業平紀の有常の息女

夫婦住み給ひし石の上なるべし 風吹けば沖つ白波龍田山と詠じけ

んも この所にてのことなるべし

「歌」^{膝まづき}ワキへ昔語りの跡訪へば^{ムカシガタ}その業平の友とせし^{ナリヒラ}紀の有常の常

なき世^{数珠を手に合掌}妹背をかけて弔らはん^{脇座に着座}妹背をかけて弔らはん

【次第】でシテが数珠と木の葉を持ち登場

一 仏に供える水。上の「曉」と重韻。

二 月も（その影を映す澄んだ水のように）私の心を清らかに澄ませてくれるようだ。月自身の心とも解し得る。

三 へただでさえ物淋しい秋の夜の、ましてここは。

四 へ西に傾いた月が照らす傾いた寺の軒端に生える草、その忍ぶ草につけても、忘れて過ぎてきた昔が偲ばれるが、人目を忍びつつ、いつまで待つ甲斐もないままに生き永らえようとするのか。以下、「忘れ」「忍ぶ」「いつまで」は「軒端の草」（忍ぶ草の別名）の縁語。忘れ草（萱草）、忍ぶ草（軒しのぶ）は「同じ草を、忍ぶ草、忘れ草といへば」（『大和物語』一六二段）と混同されている。「いつまで草」は「壁生草」とも書かれる蔦の類。

五 へ本当に、何事につけても、人にとっては思い出の残るこの世だことよ。

六 ひとつということなしにずっと。絶えず。「一筋に」は、いちずに、の意に、糸の一筋を掛ける。

七 阿弥陀如来の手にする五色の糸によって、衆生が浄土に導かれるという信仰。『往生要集』臨終行儀に説かれ、『栄華物語』玉の台などにも見える。

八 へ衆生の迷いを照らして、極楽へ導いて下さるといふ阿弥陀仏の御誓願はいかにも本当だと見えて、有明の月の行方は極楽の方角の西の山だけれど、月の光は西のみならず四方を照らし、眺め渡される四方の秋空。

3

常座に立ち アカツキ
「次第」 シテ へ 曉ごとの閑伽の水 曉ごとの閑伽の水 月も心や澄
ますらん

正面へ向きミ
「サシ」 シテ へ さなきだに物の淋しき秋の夜の 人目稀なる古寺の

庭の松風 マツカゼ（吹・更） 月も 傾く 軒端の草 忘れて過ぎて しいにしへ

を し のぶ顔 に て いつまでか 待つことなくてながらへん げにな

に ごと も 思ひ出 の 人 には 残る 世 の 中 かな

「下ゲ歌」 正面を向いたまま六
シテ へ た だ い つ と な く 一筋に 頼む 仏 の 御手 の 糸 導き 給

へ 法 の 声

「上ゲ歌」 シテ へ 迷ひをも 照らさせ給ふ おん誓ひ 照らさせ給ふ お

ん誓ひ げにもと見えて有明の 行方は西の山なれど 眺めは四方

の秋の空 松の 声 の み 聞 こ ゆ れ ど も 嵐 は い づ く と も 定めな

を前に置き 数珠を手に合掌 オト
き世の夢心 なにの音にか覚めてまし なにの音にか覚めてまし

脇座に着座のままシテへ向き テラ ヤス
「問答」 ワキ 「われこの寺に休らひ心を澄ます折節 いとなまめける

女性 ニヨシヨオ
庭の板井を 掬ひ 上げ 花水とし これなる塚に 回向の 気色 見え

九へその空に松風の音ばかりは聞えるが、音を運んでくる嵐は、どこからどう吹くとも定めもなく、定めなき迷い心のこの世の夢は、いったい何の音によって覚めようか。

一〇 読経三昧の境にあることを言う。

二 優美・上品な女性。

三 まわりを板で囲った井戸。「板井の清水とは板を筒にしたる井なり」(『顕注密勘』)。

三 仏前の供花を活ける水。

四 へお弔いの様子を見せていらつしやるのは。

五 寺の創建者。

一六 へこの世に名を留めた有名な人です。

一七 推量の助動詞を伴つて、恐らく、の意。

一八 へ生きていた当時でさえ「昔男」と言われた方で。

『伊勢物語』各段冒頭の「昔、男…」に基づいて、「昔男とは在原の中将業平」(『和歌知頭集』)とするのが中世の理解。

一九 へ業平の旧跡はさすがにまだこうして残っていて、まだまだ評判はすたれることのない業平の物語を、お話しするとやはり今も、昔男の名前だけは…。「世語り」は世上の語り草。具体的には『伊勢物語』の業平の行状。

二〇 その身はすでに亡くなって、昔男の名だけは有り(今も伝わっている)と、在りとは名ばかりで、昔に変わる荒れた在原寺、の二つの意を掛ける。一〇三頁注四の歌参照。

給ふは いかなる人にてましますぞ

常座に立ったままワキへ
シテ「これはこのあたりに

住む者なり この寺の本願在原の業平は 世に名を留めし人なり

さればその跡のしるしもこれなる塚の蔭やらん わらはもくはしく

は知らず候へども 花水を手向けおん跡を弔らひ申し候

「げにげに業平のおん事は 世に名を留めし人なりさりながら 今

は遙かに遠き世の 昔語りの跡なるを しかも女性のおん身とし

て かやうに弔らひ給ふこと その在原の業平に へいかさま故あ

るおん身やらん シテ「故ある身かと問はせ給ふ その業平はそ

の時だにも 昔男と言はれし身の ましてや今は遠き世に 故も

所縁もあるべからず ワキへもつとも仰せはさる事なれども こ

こは昔の旧跡にて 主こそ遠くなりひらの シテへ跡は残りてさ

すがにいまだ ワキへ聞こえは朽ちぬ世語りを シテへ語れば今

も ワキへ昔男の

「上ゲ歌」 地へ名ばかりは ありはらでらの跡古りて 在原寺の跡

一「叢の薄が穂を出して何事かをほのめかしている、それはいつの世の薄が、ここにこうして姿を留めているのだろう。」「一むら薄」は荒廃した庭のイメージの歌語。「穂に出づ」は薄の穂の出る意と、よそ目にあらわれる、ほのめかす、の意。「薄トアラバ…一むらすすき…穂に出る」(『連珠合璧集』)。

二一〇三頁注四の歌をふまえるか。

三「日の光敷しわかねば石の上古りにし里に花も咲きけり」(『古今集』雑上、布留今道)。

4

四 夫婦の愛情。

五 今の大阪府八尾市の東、高安山麓の地名。

六「忍び妻があつて」。

七「妻としての有常の娘と二道かけて」。

八『伊勢物語』二三段の歌。一〇九頁注一二参照。

九「不安な夜の道を行く夫の行方を案じる妻の真心が通じて、河内の女へはほとんど通わなくなつた」。

「とけて」は、観世流以外は「とけて」「解けて」。妻の不安が解消して」とする。

一〇「へまことに人の情けを知るのは歌、その歌で愛の心を述べたのももつともである」。「男・女の仲をも和らげ…るは歌なり」(『古今集』仮名序)。

二以下「ロンギ」まで『伊勢物語』二三段による。

三「隣同士に住んでいる、その門の前の」。

四「井戸の上に設けた田形の井桁」。

五「垂髪姿の童児」。

塚に目をやり(老・生) 少し前へ出
古りて 松もおいたる塚の草 これこそそれよ亡き跡の ひとむ
ら 薄の穂に出づるは 物思ふ体ナゴ
露深々とふるつかの まことなるかないにしへの 跡なつかしき気
色かな 常座に立つ
真中へ出て坐る アリワラ チウジヨオ トシヘ
「クリ」 地へ昔在原の中将 年経てここにいそのかみ 古りにし里

も花の春 月の秋とて住み給ひしに

着座のまま

「サシ」 地へその頃は紀の有常が娘と契り

妹背の心浅からざりし

に また河内の国高安の里に 知る人ありて二道に 忍びて通ひ給

ひしに シテ 風吹けば沖つ白波龍田山 地へ夜半にや君がひと

り行くらんと おぼつかかなみのよるの道 行方を思ふ心とげて よ

その契りは離々なり シテ へげに情け知るうたかたの 地へあは

れを述べしも理りなり

正面へ向き一着座のまま

「クセ」 地へ昔この国に 住む人のありけるが 宿を並べて門の

前 井筒によりてうなる子の 友達語らひて 互ひに影をみづかが

一五へ水のかぎりなく深いように、心の底まで隔てなく睦まじくして。「心の水」は歌語。

一六へおとなになつて恥かしく思う。「しく」の重韻。

一七『伊勢』二段の「かのみめ男」による業平の異名。

一八へ美しい言葉を連ねた恋文に籠められた真心もひとしおで。「言葉」「葉の露」「露の玉」「玉章」と、

縁語、掛詞で連ねた。「心の花」「色」なども縁語。美しい真心を花に譬え、「花」の縁で「色添ふ」という。

一九『伊勢物語』二三段の歌。一〇八頁注六参照。

二〇底本「老」。一一二頁注八参照。

二一女の返歌。一〇八頁注八参照。

三有常の娘の異名。『伊勢物語次第条々事』など。

三三へ本当は私は業平を恋う紀の有常の娘、かどうか、しらなみの龍田山夜半にやと詠んだ、
5

その夜にまぎれて来たのです。

三四紅葉の名所の縁で「色にぞ出づる」(それと頭れる)と言う。「龍田山」もみぢ葉の「黄」に普通の「紀」の序。

三五へ言うかと思ううちに、注連繩のように末長い結婚の約束をした年が、お互いに五歳であつたことを示す筒井筒の陰に、その姿は隠れてしまった。「二人の子、互ひに五歳にして井筒の指出でたるに長をくらべて、これより高く成らん時は、夫婦にならむと契りけり」さればつつ井つのとは、共に五歳の義なり(『冷泉流伊勢物語抄』)。

み 面を並べ袖を掛け 心の水も底ひなく うつる月日も重なり
(映・移) ツキヒ カサ

て 大人しく恥ぢがはしく 互ひに今はなりにけり その後の
オトナ ハ タガ ノチ

まめ男 言葉の露の玉章の 心の花も色添ひて シテへ筒井筒
オトコ コトバ ツユ タマズサ ハ イロソ ツツイ

井筒にかけしまろが丈 地へ生ひにけらしな 妹見ざる間にと
タケ オニ イモ マ

詠みて贈りけるほどに その時女も比べ来し 振り分け髪も肩過ぎ
ヨ オク トキ オンナ クラ ニ カミ カタス

ぬ 君ならずして 誰か上ぐべきと 互ひに詠みしゆるなれや 筒
キミ タレ ア タガ ヨ

井筒の女とも 聞こえしは有常が 娘の古き名なるべし
オンナ アリツネ ワキヘ向ク ナ

「ロンギ」 地へげにや古りにし物語 聞けば妙なる有様の あやし
フ タテ アリサマ

や名のりおはしませ シテへまことはわれは恋ひ衣 きの有常が
ニ シテ ゴロモ (着・紀)

娘とも いさしらなみのたつたやま 夜半にまぎれて来たりたり
ヨワ ワキヘ向キ

地へ不思議やさては龍田山 色にぞ出づるもみぢ葉の シテへきの
ニシロ タニ (黄・紀)

有常が娘とも 地へまたは井筒の女とも 面を伏せつつ正面へはずし
ワキヘ向キ シテハ 恥づかしながら

われなりと 地へいふや注連繩の長き世を 契りし年はつつみづ
ニシロ (結) シメナラ 立って常座へ行き チギ 正面へ少し出(五つ・筒井

つ 井筒の蔭に隠れけり 井筒の蔭に隠れけり
常座へ退り面を伏せ消え失せた体で中入り カケ カケ

一 在原業平。天長二年（八二五）～元慶四年（八八〇）。平城天皇の皇子、阿保親王の五男。 6

天長年間、行平ら兄弟に在原の姓を賜わる。五十六歳で没。六歌仙の一人。在五中将ともいう。

二へこの所（在原寺）をもつて専らご住所としていました。

三へ友達として交じわつていらつしやつた。

四 紀有常は名虎の子。弘仁六年（八一五）～元慶元年（八七七）。六十三歳で没。『伊勢物語』の中に業平との交友が描かれている。その娘は、『尊卑分脈』等に「業平朝臣室」とする。有常は業平と十歳違い。その娘が業平と筒井筒の間柄ではあり得ないが、『伊勢物語』二三段をこの二人の物語とするのが中世の解釈であつた。

五 底本（寛永九年本）は「井」、無刊記本は「井筒」。

六へ筒井筒の丈と背比べをした私の背丈は、もう大きくなたよ、あなたと逢わないうちに。『伊勢物語』の伝存本文にあつては、「つつみつゝの過ぎにけらしな」「つつみつゝ過ぎにけらしな」とある形がほとんどで、「つつみつゝ生ひにけらしな」の本文はない。ここは、たとえば『伊勢物語難義注』（書陵部本）のような、末流の古注にみえる形に基づくらしい。

七 底本「おひに」、無刊記本「老に」。

八へあなたと背比べをして来た私は、振り分け髪ももう肩に余るほどになりました。その髪を結い上げて妻となるべき人は、あなた以外にありません。

〔問答〕 在原寺参詣のアイが登場 ワキは業平の謂れを尋ねる

〔語り〕 アイ「総じて この在原寺において 業平の子細と申すは 業平

の父ここともつて もつぱら御在所にて候 業平御幼少のおん時 友達

語らひし給ふ その友達と申すは 紀の有常の息女にてござ候 これなる

井に立ち寄り給ひ 互ひに姿を御覧ぜられ おん歌をよみ給ひたると申し

候 筒井筒井筒にかけしまろがたけ 生ひにけらしな妹見ざるまにと か

やうによみ給ひ候 その時息女の御返歌に くらべこし振り分け髪も肩過

ぎぬ 君ならずしてたれかあぐべき かやうによみ給ひ おん心をうつし

給ひて 浅からぬおん契りにてござ候 またその後 業平河内の国高安の

里に知る人のありて 夜な夜な通ひ給ふ かの息女つひに妬み給ふことな

し 業平思し召すやうは いかさま心の通ふ方ありと思し召し いつもの

ごとく河内への体にて 薄の蔭に忍び給ひて 内の体を御覧ずれば 花を

摘み香を薫ぎ 業平のおん事を悲しみ給ひ おん歌を遊ばし候 風吹けば

沖つ白波龍田山 夜半にや君がひとりゆくらんと かやうによみ給ふを

九 心を寄せる、好きになる、の意。

一〇 へ妻にはきつと思いを寄せる別の男があるのだと思われて。

二 へ河内へ通うふりをして。

三 へ風が吹くと沖の白波が立ちさわぐというが、そんな風立ちさわぐ龍田山を、あなたはこんな真夜中にひとり越えて行かれるのでしょうか。『伊勢物語』本文では、下句が「ひとり行くらん」(古本系等)と「ひとり越ゆらん」(天福本、武田本等)の二系統があり、中世古注釈の本文はおおむね前者による。

三 賢臣はいったん主君に仕えたら再び仕官せず、貞女はいったん嫁せば二度と夫をもたない、の意の諺。『忠臣不事二君、貞女不更二夫』(『史記』田単列伝)に基づくが、『曾我物語』五や『義経記』二などにはこのこと同じ形で見える。

一四 不思議なこと。

一五 へ紀の有常の息女や業平のことを) お話し申すよ
うな人があろうとは想像もできません。

一六 へ業平の昔を今に返して見たいものと、裏返してかける衣にその夢を期待して。衣を返して着ると心に思う人の夢を見るといふ。「いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣を返してぞ着る」

(『古今集』恋二、小野小町)。

一七 苔を筵に見立てた、旅寝の床をいう慣用語。

業平聞こしめして

賢臣^二君に仕へず

貞女^二両夫にまみえずとは

かやう

なる賢女あるまじきと思し召し それよりも河内通ひをおん止まりありた

ると承り候

「問答」 アイ「総じてこの在原寺において 業平紀の有常の子細 われら

存じたる分申し上げ候 さていかやうなる事にておん尋ね候

ワキの返事を聞き

アイ「これは奇特なる事を仰せ候ふものかな 紀の有常の息女の子細 ま

たは業平のおん事申さうずる人は 推量にも及ばず候 さてはおん僧様尊

とうござ候ふにより 息女の亡心現はれ給ひて 物語りなされたと存じ

候 小賢しき申し事にて候へども しばらくこの所にご逗留あつて おん

跡をもおん弔ひあれかしと存じ候 終つて狂言座に退く

「上ゲ歌」 脇座に着座のまま 更け行くや 在原寺の夜の月 在原寺の夜の月 昔

を返す衣手に 夢待ち添へて仮り枕 苔の筵に臥しにけり 苔の筵

に臥しにけり

【一声】で業平の形見の衣裳をつけた後ジテが登場 常座に立つ

一へすぐに散ってしまう移り気な花だと評判の桜でも、めったに来ないあなたを待っていますよ。『伊勢物語』一七段に「年ごろおとづれざりける人の、桜の盛りに見に来たりければ、あるじ」としてこの歌がある。それを「桜に人待ちえたる女、有常女」(『和歌知頭集』)などとするのが中世の理解。

二『伊勢物語』二四段の歌「梓弓真弓槻弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよ」に基づく。女が業平を三年間待ち続け、遂に別の男と新枕を交わそうとする夜、訪れた業平が詠んだ歌。女はその

9

後を追うが追いつかず、清水のほとりで息絶える。その女を有常の娘とし、一七段と関連づけるのが中世の理解。幼な馴染みの素志を遂げて結婚した純愛の女が、夫を待ち続け、思慕の昂まりの中で死んだ紀有常の娘の物語として一貫する。「真弓槻弓」は以上の内容をこめて「年を経て」の序とした。

三 貴族の平服。

四 形見を身につけると、心が昂ぶった状態となつて舞がかりになるのが能の約束事。(『松風』(『柏崎』等)。「移り舞」は、人の舞を真似て舞う意(『賀茂物狂』(『阿古屋松』(『山姥』等)と解されるが、ここは、乗り移つて舞う、というような感も強い。

10

五 漢語「廻雪」を言い換えた語。舞姿の美しく巧みなことの形容。

六へ今この時に到り、業平の昔は在原寺に再び返つて、在原寺の井戸に澄んで映っている月の美しいこ

「サシ」^{正面へ向き}シテへあだなりと名にこそ立てれ桜花^ナ年^{トシ}に稀なる人も待ち

けり かやうに詠みしもわれなれば 人待つ女とも言はれしなり^{ワキへ向き}

われ筒井筒^{ツツイ}の昔より 真弓槻弓年を経て^{マニ ユミツキユミトシ}今は亡き世^ナになりひら

の 形見^{カタミ}の直衣身^{ノオシ}に触れて^{左袖を前に出して見つめ}

「一セイ」^{正面に向い}シテへ恥づかしや 昔男に移り舞^{ムカシオトコ}地へ雪を廻らす花^五

の袖^{ソデ}

【序ノ舞】

「ワカ」^{常座で扇を高く上げつつ}シテへここに來て 昔ぞ返す在原^六の 地へ寺井に澄める^{テライ 謡に合せて舞う}

月ぞさやけき 月ぞさやけき

「ワカ受ケ」^{七 舞台を逍遙し}シテへ月やあらぬ 春や昔と詠めしも 一つの頃ぞや^{コロ}

「ノリ地」^{正面を向いて}シテへ筒井筒^{ツツイ} 地へ筒井筒^{真中へ出} 井筒にかけし^{広げた扇をつまみ}シテへまる

立てて上にあげ^{オハ}がたけ 地へ生ひにけらしな^{シテへ}生ひにけるぞや 地へさ^九

扇で冠をさしながら舞台を大きく回り ながら見みえし 昔男の 冠直衣は 女とも見えぬ 男なりけり^{左袖を返し井筒に近}

寄つて薄をかき分けのぞきこむ 業平の面影

と。

七「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして」(『伊勢物語』四段)による。月も春も昔のそれではない、の意。

八底本は「老にけらしな 老にけるぞや」。現行観世流は「生ひに…老いに…」、他流は「生ひに…生ひに…」と解する。もう大きくなったようだよ、お互いに一人前の大人になったんだね、という、最も幸せだった時の回想であるべきで、ここに老いへの詠嘆の意はあるまい。

九「ちやうどこの姿通りに相逢うた昔男の冠直衣姿は」。『さながら』は「男なりけり」にもかかつて、まるっきり男の姿であるよ、の意をもういける。

一〇「わが姿ながら業平と思われて懐かしい」。

一一「亡夫、業平の姿をした女の幽霊の姿は」。「亡夫」は、底本は「亡婦」で『謡抄』に基づく。ボオフウと四字分の節付け。

一二「在原業平は、その心あまりて言葉足らず。しばめる花の色なくて匂ひ残れるがごとし」(『古今集』仮名序)。歌の批評を姿の模様に借り用いた。

一三「風」「芭蕉」「夢」は縁語。『列子』周穆王の蕉鹿の夢の故事をふまえ、風にも破れやすい芭蕉葉を「夢も破れ」の序とする。

「歌」

井筒に映る姿を見こみ

シテ見ればなつかしや

地

後へ退りながら涙を押える

亡夫

魄霊の姿は

身を縮めて坐り

色無うて匂ひ

残りてありはらの

寺

鐘に

鐘に

聞き入り 足拍子

しほめる花の

色無うて匂ひ

残りてありはらの

寺

鐘に

鐘に

の鐘もほのぼのと

明くれば古寺の

松風や芭蕉葉の

夢も破れ

破れ

破れ

破れ

て覚めにけり

夢は破れ明けにけり

夢は破れ明けにけり

夢は破れ明けにけり

夢は破れ明けにけり

夢は破れ明けにけり

夢は破れ明けにけり

夢は破れ明けにけり